

「観光地」

(1998)

一ヶ月ぶりに帰郷し、季節も良い頃だし、家内と「尾瀬」に行った。「水芭蕉」のシーズンもやって来て、おそらくは大混雑の予想される時だ。せめて金曜日の休暇を取り、皆と少し時間をずらしたつもりだったがやはりそれでも人は多い。

それは良いとして、こういう日本の「観光地」の施設のお粗末にはいつも憤りを感じる。駐車場はお粗末、マイカーについては徹底的に規制するのはおおいにやってもらって良いが、大型バス・マイクロバス・タクシーなどの公共交通機関の運営がそもそもお粗末である。公共のトイレがこれは又徹底的にお粗末である、我々男性の場合は特にどうという事ではないが、ご婦人方は本当に気の毒だ。そして一番見苦しいのが、民間の土産物・食べ物屋さんである。おそらくは昔から、その土地や商売の権利は持っていて、他人のとやかく言う筋合いのものではないかもしれないが、その観光地の中でも最上の立地にあり、観光地の「顔」となるべき場所で、まるでその存在そのものと、ソフト・デザインが汚い。「観光」というのは、お客さん当事者にとってみれば、年に何度かの大事、休暇までとり、大金をはたいて、しかも心と体を安めに来たというのに、せっかくの壮大な自然観光資源がありながら、その入り口にあるお粗末な施設と嫌らしい商売にはゲンナリしてしまう。

あれだけの素晴らしい観光資源を見るのだから500円でも1000

円でもいいからどこかが徴収して（年間およそ何億・何十億という収入になるはずだ）、施設そして自然保護などの整備に使ってもらって、もう少し快適に見させてもらった方が余程良い。

誰がコントロールすれば良いのか？ 民活の動きに逆行するが、この件だけは、お役所に任せた方が良いのだろうか？ 観光地の場合、多くは「国立公園」となっているが、土地の所有者がそうっていないのがどうもネックのようだ。それとも「あるがままの自然の風景を見るのにお金を取るとは何事か！・・・」というモンスターたちが現れるのだろうか？

観光地の話からちょっと外れるが、日本中のパブリックトイレが本当に汚い。これもいつも思うのだけど、50円でも100円でもお金を取れば良いのだ（コイントイレという発想だ）。利用する人数は多いが、当人にとってみれば、そんなに度々・毎日ある事でも無し、その莫大な収入によって快適で明るい、美しいトイレを造ってもらった方が余程良い。人の基本的な排泄行為に「お金が要るのか！」と怒り出す人が多いのだろうか。

「旅に出る」

機上

寒雲の翼震わす伊豆上空
冬晴れの機上鋭き富士の見ゆ
翼振れば雲間眼下の海群青



長崎

胸広き平和像なる秋の昼
肌割れし木のマリヤ像秋寒し
教会を見上ぐる場所はそぞろ寒
聖像を照らす足下の群れすすき

京都

春は昼 舞妓の言葉かん高き

渡月橋 とぎきょう 渡れば広き草紅葉 くさもみぢ



山深く紅葉 もみぢ する場所水たぎる

保津川の若葉の淵 ふち を船滑る

風と行く 保津川の瀬の白さかな

水温みカヌーもありぬ舟下り

千体の仏も温 ぬく き春障子

春風 かたまり の塊の中奈良路行く

天平の春陽の中の仏たち

鹿 か の子来て人の眸 め をして訝 いぶか しむ

鶴飼船

鶴飼客 酔うて口開け水の上
鶴飼果て 鶴匠の高き声通る
鶴飼終へ 川面の絵巻消えてゆく
篝火の遠ざかり行く鶴川かな
絵巻終えエンジン全開鶴飼船
鶴篝の流れのままに夜を尽くす

青森

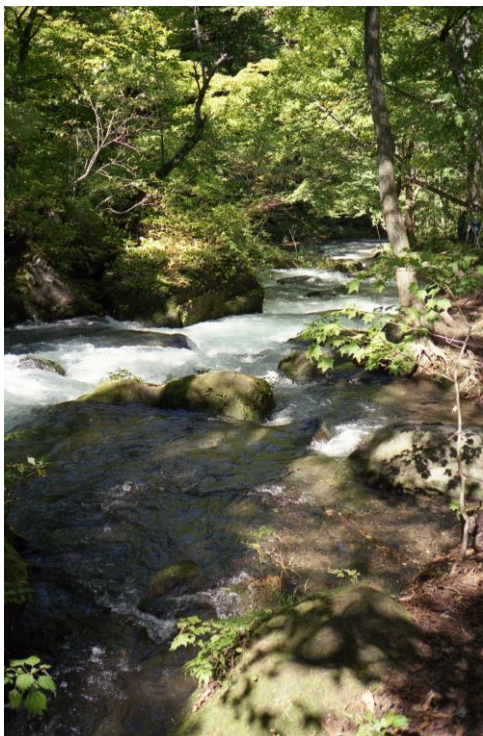
城のなき城址全て草若葉
花爛漫 戦もありし城址かな
青嵐 丘のトルソー 毅立せり
夏近し平和の礎 瞼を開く

十和田湖に沈む話や秋深し



錦秋の薄絹纏う湖の裸像

奥入瀬の瀬音の跳ねて秋立ちぬ



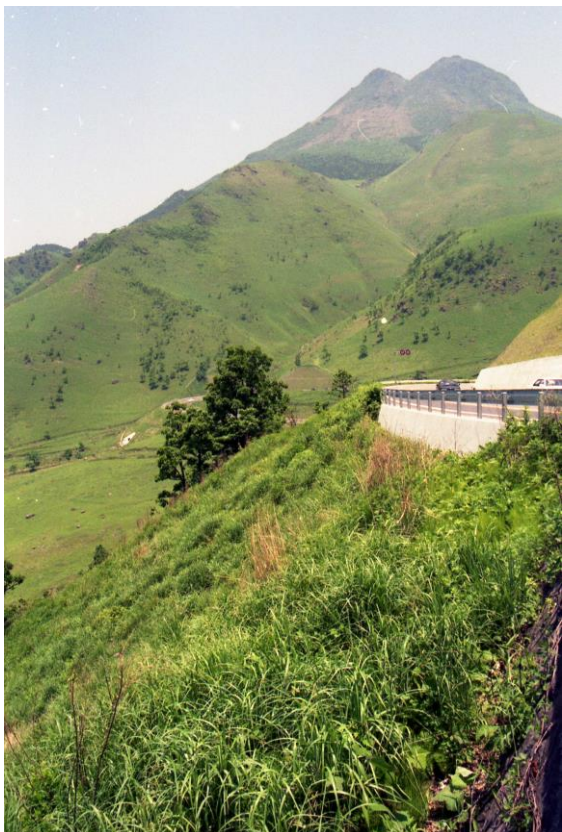
山峡の曲がりて紅葉濃く薄く

霧深き美ヶ原の赤き像

至仏山 水の白さに浮かびおり

歩け歩け至仏の峰は真正面

全山を若草色に豊後富士



薔薇を見て 深大寺蕎麦又旨し

島

近づけば若葉色なる佐渡ヶ島

生海胆を啜る 涼しき壱岐の夜

一岐国の丈夫海胆を啜りけり

島人の日焼けし笑顔磯祭り

烏賊刺しを突つけば玄海灘深し

殉教の五島の白砂 光る風

殉教の五島をめぐる春の園

菜の花に埋もれし島の聖教会

菜畑に島の教会浮かびおり

浜木綿の海の間の天主堂



鰯雲集めて揺るる忘れ潮

島に寄る鳥あり春を持て来る

近づけば蜜柑の花の島匂う

春は來ぬ島に小船の舟渡し

思う事ありて海月くらげは陸目指す

夏夕陽終わる迄見て島泊まり

島の夜の旅人どうし天の川

防人の草生くさむす墓や虫時雨

沖つ島 防人眠る星明かり

郷思なつう防人の見し銀河あり

防人の島や銀河に蔽われし

白南風に帽子をとれば海光る
沢庵と握り飯あり磯遊び

阿蘇

大阿蘇の麓は広し 草萌ゆる
飛び込むか問うて笑いて阿蘇火口
遠霞 名知らぬ阿蘇の五山見ゆ
牛一頭 若草萌ゆる草千里



若葉越し頂白き 伯耆富士
伯耆富士 稜線光る残り雪

神居ます出雲の国の遠霞

とおかすみ

神住まう山の暗さの秋の暮



街眼下 城址に立てば 晩夏光
目黒川冷えて遠富士見晴るかす
花見船土手行く人の賑やかし

晩夏光国東の地は鈍色くにさきに

国東の御仏の里花また花



波の花 能登は静かな磯の町

満ちてくる犬吠崎の冬の海

春風の生まる丘あり城ヶ島

九十九里どこまで行けど鰯雲

冬怒涛小さく見ゆる九十九里

神住まう山の懐ふんしん春浅し

山の湯の小さき乳房 柚子浮かぶ

遠き冬 村の跡形ダムの底



夏の風 音戸渡れば瀬戸の島

南風 海を渡りて長瀬鼻

海黒く逃げる卯波のありにけり

玄海のコスモス畑 能古島

能古の島 丘のすべては秋桜

外^とも内も金色堂は暗きとこ

海に落つ 菜畑の端^{はし}探りたき

山葵^{わさび}田は雪の連山背負いけり

山葵^{わさび}田に水^{ほとばし}迸る窪みあり

山葵^{わさび}田の水底の水動きおり

山裾^{わさび}の山葵田の水透き通る

沖繩

目借り時米軍基地も静まりぬ
炎昼やひめゆり学徒の碑を焦がす
水黒く春愁にある人魚姫

春愁の我も旅人口遊ぶ

くちずさ

野遊びの宿の弁当焼きムスビ

雨煙る裕次郎灯台春の暮

朝霧に海鳴り遠き人を呼ぶ

海鳴りて冷まじき風生まれけり

ナギ

山口

春愁の我も旅人口遊ぶ

くちずさ

野遊びの宿の弁当焼きムスビ

雨煙る裕次郎灯台春の暮

朝霧に海鳴り遠き人を呼ぶ

海鳴りて冷まじき風生まれけり

ナギ

瑠璃光寺聳つ青き秋天にそばだ

無人駅桜花ひとときわ賑やかし

床波の駅の青葉や海匂うどこなみ

無人駅 眼下の海や春隣

春時雨山陽線の軋む音しぐれ

冬の風鉄路の音を揺さぶりぬ

雪晴れに遠き鉄路の音聴こゆ

秋天に踏み切り鳴れど人は来ず

木枯らしや山陰線の音遠し

若葉濡らす朝明けぬ間に宿出でむ

新緑のいのちなるべし山路行くやまぢ

花菜道 海遠けれど海の風

花菜道 光と風の生まる場所はなな

菜の花の浄土にありて寝まりけり

夏木立両目瞑れば潮の音つむ

此処よりは崇りの花野平家塚ただ

若葉影 奇兵隊像眉若しまゆ

草笛を鳴らす小徑でありにけり

秋吉台

秋吉台 草燃え尽し春を待つ



秋吉の野火のび遠ざかり春近し

この世にも地を焼く火あり野火猛る

火となりし男衆なり草を焼く

秋吉の男千人山を焼く

草を焼く火勢 時折狂いけり

八代

鶴の里四羽の鶴をいとおお悩なしむ

人の眼にすが縫ぬるが如し四羽の鶴

鶴の里 残るは鶴のふたつがい

今年又八代盆地の夫婦鶴めおと

八代野の幾羽の鶴の神隠し

鶴かくれい唼に八代盆地の明けにけり

霧晴れるふるさとの田に鶴立てり

ナベヅルの静寂の里 冬霞がすみ

ナベヅルの静かな朝の寒九かな

つうと呼べば 振り返る鶴いるような

鶴啼きぬ父母ちちははを呼ぶ声なりし

何もかもダムの底なり山粧う



螢火や夢に見しひと遠き人
螢抱き胸温かき女らし

罪深し螢一羽を懷に

連れてきし螢の命夜に放つ

持ち帰る螢を放ち罪逃がる

紅梅や軒端は暗き瑠璃光寺

読経止み天下の夢の続きおり

山茶花の散り敷く道の狭さかな

口吸いの如く熟柿を吸いにけり

炎昼の周防国分寺 樟若葉

四葩咲く周防阿弥陀寺日照り雨



リング売る姫おうなのナイフ林檎割る

林檎売る姫おうなと不肖ふしやうの子の話

にび色の野に冬の芽の生きており

焼野浜やけの一人になれば大夕焼け

晩夏光ビルのガラスは空に溶け

黄落の真中にあれば街暮るる

朝ぼらけもう咲いている石落つちの花

夏菩薩 今が命の乳首見ゆ

薄衣うすぎぬに乳首のお慈悲夏仏

桃咲いて阿修羅の頬の豊かなり

冬陽濃し菩薩の指の柔らかし

掌てのひらに衆生迷える花祭り

餅を焼く石炭ストーブ山の小屋

菜畑に光の祠ほこらあるらしき

御仏みほとけも細目をすなる春催もよおしい

草笛や時折天使の声もする

大輪の空に凍み入る冬花火
冬花火高きになれば寂しさよ
どんと焚く目出度き善男善女かな

萩

つづらおり

九十九折 降りれば一目萩の里
落ち椿 幾万散りて花の道
椿路抜けて淋しき海の町

毛利家を祀る森なり椽の花

とち

白魚のひかりの跳ねる四つ手網
しろうおのいのちの弾む四手網

白魚の腸動き水撥ねる

は

白魚の重きいのちを踊り食い
城址より見上ぐる山の大若葉
蜜柑咲く土塀の町の高き空

日本海

つのしま

角島に涼風生まる北岬
石積みの灯台立てる花の丘

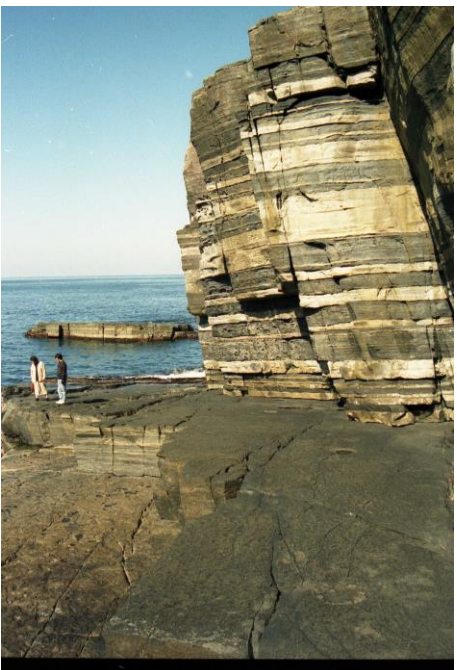
新緑の懸崖背負い海怒涛

万緑の零るる光の海怒涛

懸崖の新緑落つる運河かな

枇杷の実の光りて北の海遥か

街抜けて日本海なり大卯波



楊貴妃の墓ある浜に卯波かな

瀬戸内



海からの春一番や島を越ゆ
陸奥^{むつ}沈む周防^{すおう}の海^{うみ}の卯浪^{うなみ}かな

卯涛来る戦艦陸奥^{むつ}の沈む海

沈みたる屍^{しかばね}の蒼^{あお} 冬の海

武蔵^{むさし}てふクレイン船座す冬の海

冬の海砦^{とりで}となりしクレイン船

関門海峡

海碧く太き寒潮潜むらし

海峡の汽笛慟哭冬しぐれ
雪が降る海峡の向こうも雪かしらん
関門の橋の灯揺るる夕霞
海望む窓を覆いし柿若葉
窓若葉 関門海峡見え隠れ



寒晴れの海峡門司は近くなり
夏めきて門司の海辺の焼きカレー
関門の潮溯り汽笛牙ゆ
渾身の曳き舟のゆく春の潮
海峡に落つる木叢の深緑

小峰より緑こぼるる壇ノ浦

寒潮の潜^{ひそ}みし海の深緑

春潮に送らう船の唸^{うな}りする

海峡を越える鳥あり鳥曇り

海峡に碧き春潮潜^{ひそ}みおり

巖流島

巖流島大夕焼けの中にあり

決闘の果てし船島春の暮
ふなしま

卯波立つ決闘果てし巖流島

小次郎の血は夕焼けに島暮れる